

## 第6章 考 察

### 1. 鳥取県内における同棺複数埋葬について

#### 1. はじめに

島古墳群7号墳では、一つの箱式石棺に二体を埋葬する埋葬形態がみられた。こうした同棺複数埋葬（合葬）は、西日本においては兵庫県以東の瀬戸内海沿岸や山陰東部、北部九州地域に分布することが知られている<sup>(16)</sup>。

かつて小林行雄は、横穴式石室と同棺複数埋葬を同系列上にあるものとして理解し、家族墓であるとした。その後、辻村純代は、東中国地方や北部九州地域の同棺複数埋葬における遺体配置や組み合わせの詳細な検討から、同棺複数埋葬の原理は父系制の表現であり、後の横穴式石室とは異なる性質の墓制であると考えた。辻村の研究は、箱式石棺内に遺存した人骨の検討により親族構造の解明を目指した点で高く評価されており、医学的所見を積極的に考古学的成果に導入した点でも注目される。ただ、論旨の性格上、形質学的検討が前提となっており、その結果を考古学的手法で検証することは困難である。

一方、古墳が社会的な産物である以上、棺内における遺体の検討と同時に、それを内包する棺の構造や墳丘の構築過程など、考古学的見地からの検討も必要と考えられる。本稿では、埋葬に伴う土器や、古墳構築過程の検討から、同棺複数埋葬の初葬から最終埋葬までの時間幅に注目して論を進めたい。

#### 2. 分布と時期

鳥取県内における同棺複数埋葬は24例を確認した。このうち人骨の遺存するものは14例である。人骨の遺存しないものについては、棺内に置かれた石枕もしくは土器枕の配置から複数埋葬を想定した<sup>(1)</sup>。

分布は、西伯耆4例、東伯耆11例、因幡10例であり、西伯耆において少ない。周辺地域では、兵庫県北部や東瀬戸内沿岸、さらには北部九州でも確認されている。すべてが同じ系譜上に位置するとは言えないが、同棺複数埋葬が偶発的な行為によるものではなく、それが墓制の一つとして存在したことは認められてよい。時期的には、弥生時代後期末を上限とし、古墳時代前期から中期にかけて盛行することは既に論じられている。県内では弥生時代に属する検出例はないが、古墳時代前期前葉<sup>(9)</sup>には広岡82号墳などで確認できる。前期中葉から後葉になると、検出例が増加し、因幡6例、東伯耆2例、西伯耆1例が認められ、中期前葉から中葉では、因幡2例、東伯耆3例となる。中期も後葉になると、東伯耆の1例のみとなる。5世紀後半代には認められないが、5世紀末から6世紀初頭の東伯耆、西伯耆において再び出現し、西伯耆では6世紀後半まで継続的に使用される。後述するが、6世紀代の西伯耆の例は、5世紀代のものとは異なる性質をもつとみられることからこれらを除くと、県内における同棺複数埋葬は、前期前葉の因幡を先駆とし、前期中葉から中期の中葉にかけて盛行した葬制とみることができる。

#### 3. 棺構造からの検討

棺の形態には、箱式石棺と木棺がある。箱式石棺が主流であり、25例中17例を占める。特異な形態として、島7号墳の如く、箱式石棺内に木棺をもつものもある。同棺複数埋葬に多用される箱式石棺は、その規模や構造からみて基本的に一人用である。多くの箱式石棺では、両小口のうち一方を幅広に作ることで頭位方向を表現するが、この狭い埋葬空間に2体、ときには3～4体の遺体を合葬している<sup>(2)</sup>。この矛盾が同棺複数埋葬の最大の問題点である。県内の例では、小口側の一方が幅広に作られる場合、人骨の遺存するものについては初葬の頭位方向と一致している。したがって、棺構造は基本的に最初の被葬者に合わせて作られたとみてよい。

西伯耆の向原6号墳や百塚55号墳、日下12号墳では、石棺の幅が0.69～0.75mと通常の箱式石棺と比べて倍近くの広さ作られている。ここに4～7体という多数の遺体を埋葬している。これらはいずれも6世紀前半代の築造であり、6世紀末まで埋葬が継続されている。向原6号墳では、一方の小口側の蓋石を高く作ることによって初葬の頭位を表現しているが、棺の規模からみて、棺の構築の段階から既に多人数の追葬が予定されていたとみて間違いない。その点では他の同棺複数埋葬例とはやや異なる性格を有すると考えられる。追葬が前提であるという点では、すでにこの時期の米子平野では初期の形態が導入されている横穴式石室や、さらに後に盛行する横穴墓との関係を言及すべきなのかもしれない。

1. 鳥取県内における同棺複数埋葬について

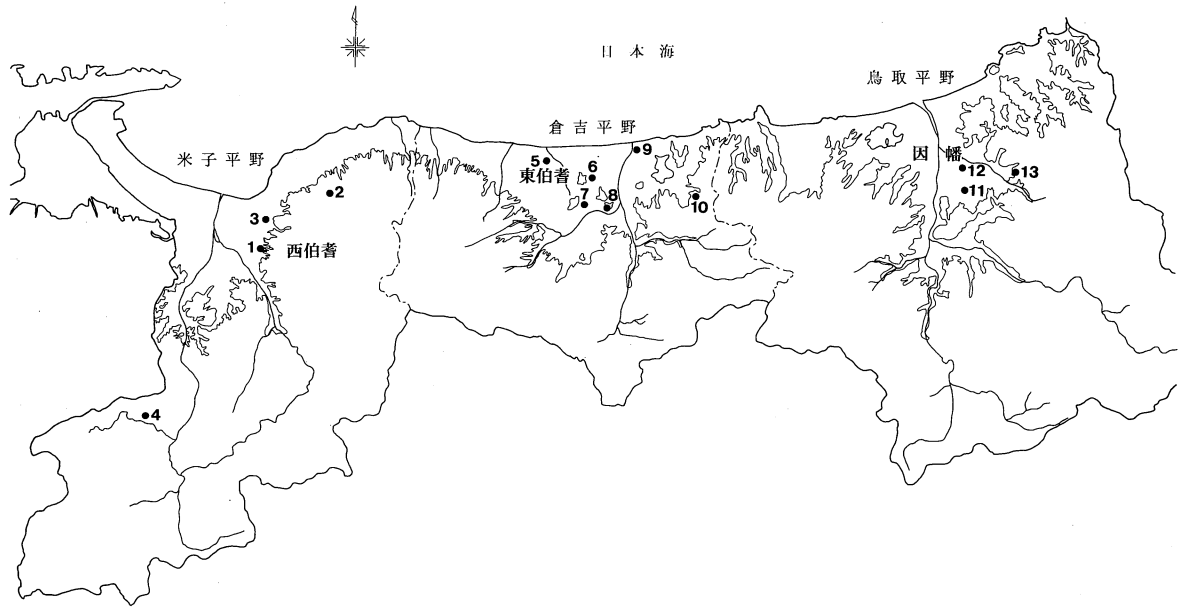


図1 同棺複数埋葬分布図

番号 文献	古墳名	墳形	墳丘規模(m)	埋葬時期 <sup>①</sup>	埋葬施設	棺の規模(内法)	埋葬 人数	埋葬形態	埋葬順序	枕	構築方法	備考
西 伯 耆	1 日下12号墳	円墳	12.6	6 c 中～後半	第1主体・箱式石棺	1.76×0.71	7体	詳細不明	不明	須恵器枕	不明	
	2 向原6号墳	円墳?	不明	5 c 末～6 c 後半	1号埋葬施設・箱式石棺	1.9×0.69	6体	南東頭位: 2体(①女:20～30歳、②男35～50)、北西頭位: 2体(③男30～40歳、④男30～45)、不明: 2体(⑤高年齢、⑥高年齢)	⑥→⑤→③→④→②→①	須恵器①坏蓋・坏身、②坏蓋③なし④坏身、⑤⑥なし	掘込墓壇a類	
	3 百塚55号墳	円墳	14	6 c 前半～6 c 後半	箱式石棺	1.85×0.75	4体	東頭位: 2体(①不明、②不明)、西頭位(③女・若年、④不明)	①or②→③or④	須恵器蓋坏①②④、③須恵器高坏坏部	不明	
	4 印賀6号墳	方墳?	7×7	青木Ⅶ(新)期	第1埋葬主体・箱式石棺	1.93×0.44	2体	北東頭位: 2体(女・熟年①、男・熟年②)	不明	石枕(板石)	掘込墓壇c類	
東 伯 耆	5 瀬戸岩子山35号墳	円墳	18	不明	第1埋葬施設・箱式石棺	1.9×0.45	2体	南東頭位: 1体(①女・壮年中期)、北西頭位: ②男・壮年中期	①→②	①②V字状石枕	掘込墓壇c類	交差埋葬
	6 島7号墳	円墳	20	天神川Ⅳ～Ⅴ期	第一埋葬施設・箱式石棺(木棺を内包)	石棺: 2.2×0.4～0.5、木棺: 2×0.45～0.5	△2体	南頭位: 1体①、北頭位: 1体②	不明	①V字状石枕、②鼓形器台	不明	
	同上	同上	同上	天神川Ⅳ～Ⅴ前後期	第二埋葬施設・箱式石棺	1.6×0.38	△2体	東頭位: 1体(①女・壮年)、西頭位: 1体(②女・熟年)	不明	なし	不明	交差埋葬
	7 イザ原6号墳	円墳	14	天神川Ⅵ～Ⅶ期	箱式石棺	1.8×0.45	△2体	北頭位: 1体①、南頭位: 1体②	不明	①②V字状石枕	不明	
	8 夏谷3号墳	円墳	18.2	天神川Ⅲ～Ⅳ期	1号埋葬施設・箱式石棺	1.9×0.55	3体	南頭位: 2体(①男・青年②男・壮年中期)、北頭位: 1頭位(③女・壮年中期)	②→③→①	①②③V字状石枕	掘込墓壇a類	
	同上	同上	同上	1号埋葬施設より後出	3号埋葬施設・箱式石棺	1.6×0.49	2体	南頭位: 1体(①男・壮年前期)、北頭位: 1体(②女・壮年前期)	不明	①②V字状石枕	掘込墓壇a類	
	9 長瀬高浜遺跡SX49	—	—	不明	箱式石棺	0.91×0.21	2体	頭位不明: 2体(①男・成人、②不明・幼児)	不明	なし	—	
	長瀬高浜遺跡SX52	—	—	天神川Ⅳ～Ⅴ期	箱式石棺	1.86×0.59	△2体	東頭位: 2体(①不明②不明)	不明	①②V字状石枕	—	
	長瀬高浜遺跡88号墳	不明	不明	5 c 末～6 c 初	第1埋葬施設・箱式石棺	1.77×0.46	2体	北東頭位: 1体(①不明)、南西頭位: (②性別不明・青年後期～壮年前半)	不明	①②V字状石枕	不明	
	10 川上83号墳	円墳	23	天神川Ⅲ期	1号墓・木棺	4.4×0.6	△2体	東頭位: 1体①、西頭位: 1体②	不明	鼓形器台・高坏坏部	不明	
因 幡	同上	不整円形	23	不明	5号墓・箱式石棺	1.9×0.3	3体	東頭位: 2体(①女、②男)、西頭位: 1体(③女)	①or②→③	①②③V字状石枕	不明	
	11 広岡76号墳	方墳	10×12	岩吉Ⅵ(新)期	第1主体部・木棺墓	2×約0.45	△2体	東頭位: 1体①、西頭位: 1体②	不明	①②鼓形器台	不明	
	広岡77号墳	方墳	12×11	岩吉Ⅵ(新)期	主体部・木棺墓	2.2×0.53	△2体	南東頭位: 1体①、北西頭位: 1体②	不明	①②鼓形器台	不明	
	広岡78号墳	方墳	13×11	岩吉Ⅵ(新)期	主体部・木棺墓	1.9×0.35	△2体	南東頭位: 1体①、北西頭位: 1体②	不明	①②鼓形器台	不明	
	広岡79号墳	円墳	12	岩吉Ⅵ(新)期	第1主体部・木棺墓	2.5×0.4	△2体	東頭位: 1体①、西頭位: 1体②	不明	①高坏、②鼓形器台	不明	
	広岡81号墳	円墳	11	岩吉Ⅵ(新)期	第2主体部・木棺墓	2.27×0.45	△2体	東頭位: 1体①、西頭位: 1体②	不明	①②鼓形器台	不明	
	広岡82号墳	円墳	11	岩吉Ⅵ期	第1主体部・木棺墓	2.50×0.50	△2体	東頭位: 1体①、西頭位: 1体②	不明	①壺口縁部、②鼓形器台	不明	
	12 面影山33号墳	円墳	15	岩吉Ⅵ(新)期	第1主体部・箱式石棺	1.88×0.53	3体	南東頭位: 2体(①女・20代後半、②男・30代前半)、北西頭位: 1体(③壮年前期)	①or②→③	壺口縁部(東頭位の1体)	掘込墓壇a類	交差埋葬
	13 糸谷3号墳	方墳	20×18	岩吉Ⅶ(古)期	1号石棺墓・箱式石棺	1.83×0.5	3体	北西頭位: 2体(①男・若年、②女・壮年後半)、南東頭位: 1体(③性別不明・8歳前後)	②or③→①	②壺口縁部、①板石(西頭位)	不明	
	同上	同上	同上	不明	2号石棺墓・箱式石棺	1.82×0.4	3体	南東頭位: 2体(①男・壮年～熟年、②男・壮年後半)、北西頭位: 1体(③男・壮年後半)	②or③→①	①②円礫	不明	
	同上	同上	同上	岩吉Ⅶ(古)期	3号石棺墓・箱式石棺	1.73×0.49	4体	北西頭位: 2体(①男・熟年、②女・熟年)、南東頭位: 2体(③男・壮年、④女・壮年～熟年)	①→③→②or④	①高坏坏部、②高坏脚部、③板石、④円礫	不明	

表1 同棺複数埋葬古墳一覧表

#### 4. 構築過程からの検討

古墳は、宗教的かつ政治的な構造物とみられており、古墳構築過程の検討は、古墳を読み解く重要な鍵の一つといえる。墓壇の構築法については、墳丘と墓壇を平行して構築する構築墓壇と、墳丘の完成後墓壇を掘削する掘込墓壇、さらに墓壇をもたない無墓壇に大別されている。

最も一般的にみられる掘込墓壇のうち、墳丘基盤面に墓壇を掘削し、その後盛土を構築するタイプは掘込墓壇c類とされている。これは、完全に埋葬が終了した後に盛土でバックされた状態であり、盛土完成後の追葬はありえない。

注目されるのは、墓壇が掘込墓壇c類で構築されているにもかかわらず、同棺複数埋葬されていることである。印賀6号墳や瀬戸35号墳がこれにあたる。これらは、同時に埋葬されたか、もしくは追葬が終了するのを待って盛土を形成したかのいずれかである。さらに、両者とも棺内からは2体の人骨が確認されているが、瀬戸35号墳では下肢を交差させて埋葬する交差埋葬が指摘されている。掘込墓壇c類で構築された古墳は、極めて短期間に埋葬が行われたことは間違いない。

#### 5. 埋葬の時間幅

初葬から最終埋葬までの時間幅について考えてみたい。この際に指標となるのは、棺内において枕として使用された土器である。5世紀後葉以前では、土師器の鼓形器台が多くを占め、まれに土師器の壺や甕の口縁部、高坏の杯部などが使用される。

複数の遺体に土器枕が伴う例として鳥取市の広岡古墳群がある。県内では最も早い前期前葉から中葉にかけて同棺複数埋葬が行われている。調査された7基の古墳に作られた主体部12基のうち6基で同棺複数埋葬が確認されたことになり、一つの古墳群における出現頻度が極めて高い点で注目される。木棺であるため、人骨は遺存しないが、両小口に口縁打ち欠きのある鼓形器台などを置く形態から、全て対置埋葬の形態をとるものと想定できる。同じ棺から出土した土器同士の型式差を検討してみると、82号墳第1主体部出土の鼓形器台と壺は、一型式程度の時期差を認めてもよいのかもしれないが、他の5基についてはほぼ同型式の所産と考えられる。この時期における一つの土器型式のもつ時間幅は30～50年程度と想定されているから、この時間幅の中で追葬が行われたと考えられる。

ここで注目されるのは、広岡古墳群をはじめ、島古墳群7号墳、川上83号墳では棺材として木棺が使用されていることである。木棺に2体以上を埋葬する例は全国的にみても極めてまれである。地域は異なるが、千葉県石神二号墳（5世紀中葉）では、長さ6.9mの木棺内から対置埋葬されたとみられる状態で石枕2個体が出土している。追葬が困難な粘土槨であることから、同時に埋葬されたものと考えられる。地中に埋設した木棺がどの程度の期間で追葬不能な状態まで腐朽するのかは判然としない。棺の材質、厚さなどにもよるだろうが、埋葬後30～50年もの期間を経たものを再び開棺して追葬に耐えるとは考えにくい。推測にすぎないが、追葬である限り、最終埋葬までの時間幅は10年以内とみるのが自然であろう。木棺を使用する同棺複数埋葬は、同時埋葬か、もしくは長く見積もっても10年を越えない程度の追葬によるものと考えられる。

さらに、箱式石棺でも極めて短期間に合葬されたとみられる例がある。瀬戸岩子山35号墳1号埋葬施設、島7号墳第二埋葬施設、面影山33号墳第1主体部では、対置の状態では埋葬された2体は、互いに下肢を交差させた状態であった。骨の配列はほぼ原位置を保持するものとみられることから、同時埋葬かもしくは極めて近い時期の追葬とみられる。

一方、西伯耆の向原6号墳、百塚55号墳、日下12号墳は、やや時期の下る5世紀末～6世紀前葉の築造とみられる。須恵器の蓋坏が枕に使用されており、その型式から埋葬の時間幅が推察できる。向原6号墳では、5世紀末～6世紀後葉、百塚55号墳では6世紀前葉～6世紀後葉、日下12号墳では6世紀中葉から後葉に相当する須恵器が出土している。約40～80年程度の時間幅を持つことになり、先述の箱式石棺の例と比べて長期である。棺内からは4～7体分の人骨が出土しており、このことから相当な時間幅をもって追葬が行われたものと考えられる。先述した棺構造の点や、追葬期間の長さからみて、6世紀代と5世紀代の同棺複数埋葬は区別してよからう。

## 6. まとめ

同棺複数埋葬という墓制を、棺構造や古墳の構築過程、埋葬の時間幅などに注目して検討してきた。簡単にまとめると次のようになる。

- 1) 同棺複数埋葬は、偶発的な結果ではなく一つの墓制として存在し、県内では古墳時代前期中葉から中期中葉にかけて盛行した。
- 2) 棺構造や古墳の構築方法の検討から、同棺複数埋葬の初葬から最終追葬までの時間幅は極めて短期間に行われたものと考えられ、中には同時に埋葬されたものが存在すると考えられる。
- 3) 棺構造や埋葬の時間幅からみて、6世紀代に築造されたものは5世紀代のものとは原理的に異なる可能性がある。

県内での例をもとに考察したが、少数の例から得た結論を他の多数に敷衍したきらいは否めない。以上の結論は、さらに検出例を待つて再度検証されるべきである。

日本列島における墓制の歴史において、一つの棺に複数の遺体を埋葬することが広く行われたのは古墳時代に限定される。墓制が社会において大きな意味を持ったと考えられる時代にあつて、一人用として構築された石棺に複数の遺体を埋葬することを単なる偶然としては理解しにくい。今後、周辺地域も含めた考古学的な検討が必要である。また、墳丘上における複数埋葬との関係や、本論ではほとんど触れなかったが、人骨の検討による親族関係のさらなる検討など課題は多い。

(岡野雅則)

## 註

- (1) 人骨の遺存しない例については、枕の有無により以下の基準で抽出した。  
県内の石枕は板石2枚を断面V字状に組み合わせた形態が主流であることから、棺内の小口側両端にこれが設置されているものについて複数埋葬と判断した。  
県内の土器枕には、一般に鼓形器台、高坏、壺や甕の口縁部が使用され、設置される際には口縁部に打ち欠きが認められる例が多い。人骨の遺存する例から、棺内小口側中央に置かれており、かつ枕として不自然でないものを土器枕と判断し、両小口にこれがみられる場合、複数埋葬と判断した。
- (2) 埋葬形態には、先葬者と頭位方向を同じくする並置と、先葬者とは逆の小口方向に頭位を向ける対置があることは、既に辻村純代の指摘するところである。辻村は、頭位方向に社会的な意味を持たせ、頭位方向の差違が父系同族か非父系同族かを表現したものと考えた。
- (3) 埋葬時期の判定に際して、土師器については、各地域で提示されている編年案のうち古墳時代を網羅するものを使用した。おおよその併行関係を表に示す。なお、時期区分については、今後流動的であることを付け加えておく。須恵器については、陶邑古窯跡群の田辺編年を使用した。

## 参考文献

1. 米子市1999『新修米子市史』(第7巻資料編)
2. 大山町教育委員会1982『向原古墳群』
3. 佐々木古代文化研究室1960『ひすい』71号
4. 日南町教育委員会1992『印賀古墳群』
5. 大栄町教育委員会1998『瀬戸岩子山遺跡発掘調査報告書』
6. 本報告書
7. 倉吉市教育委員会1983『イザ原・小林古墳群発掘調査報告書』
8. 倉吉市教育委員会1996『夏谷遺跡発掘調査報告書』
9. 鳥取県教育文化財団1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V』
10. 鳥取県教育文化財団1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI』
11. 東郷町教育委員会1993『川上83号墳調査報告書』
12. 鳥取市教育福祉振興会1996『面影山古墳群発掘調査報告書』
13. 鳥取市遺跡調査団1989『広岡古墳群発掘調査概要報告書』
14. 同志社大学文学部文化学科1994『糸谷古墳群』
15. 和田晴吾1989「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』(古代史復元第6巻)
16. 辻村純代「東中国地方における箱式石棺の同棺複数埋葬」『季刊人類学』14巻2号
17. 辻村純代1988「古墳時代の親族構造について」『考古学研究』35巻1号
18. 田中良之1995『古墳時代親族構造の研究』
19. 鳥取県教育委員会1978『青木遺跡発掘調査報告書III』
20. 牧本哲雄1999「古墳時代時代の土器について」鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡III、園第6遺跡』
21. 谷口恭子1991「土器」『岩吉遺跡III』鳥取市教育委員会

	西伯耆	東伯耆	因幡
	青木編年 <sup>(19)</sup>	天神川下流域編年 <sup>(20)</sup>	岩吉編年 <sup>(21)</sup>
弥生時代後期末～ 古墳時代前期前葉	V・VI(新)期	天神川Ⅰ期	V(新)期
	VII(古)	天神川Ⅱ期	VI(古)期
前期中葉	VII(新)	天神川Ⅲ期	VI(新)期
前期後葉		天神川Ⅳ期	
中期中葉	VIII(古)	天神川Ⅴ期	VII(古)期
中期中葉	VIII(新)	天神川Ⅵ期	VII(新)期
中期後葉	IX(古)	天神川Ⅶ期	VIII(古)期

表2 編年対照表